［要旨］

知られざる文人たちの奢侈批判
――1782年ブザンソン・アカデミー懸賞論文――

森村　敏己

フランスにおいて1730年代に始まった奢侈論争は、半世紀を経た後も知識人たちの関心を惹くテーマであり続けた。多くの出版物が公刊されただけでなく、アカデミー・フランセーズをはじめ、合わせて６つのアカデミーが奢侈をテーマとした懸賞論文を募集している。当時、アカデミーの懸賞を獲得することは文芸共和国の一員として名を上げようとする無名の著述家たちにとって登竜門の役割を果たしていた。本稿の目的は、これらの懸賞論文のうち、時期的にはもっとも遅い1782年に募集されたブザンソン・アカデミーの懸賞「奢侈は習俗および国家を破壊する」に応募した作品を主要な分析対象とすることで、18世紀後半における奢侈論争の変化を考察すると同時に、懸賞論文がもつ重要性を検討することにある。

1760年代以降、奢侈を擁護する人々の間でも、「有害な奢侈」と「有益な奢侈」を区別し、前者を非難する傾向が強まったとされる。「有害な奢侈」とは徴税制度や独占特権といった政治的要因に由来する極度な富の不平等の結果だとされ、フィナンシェと宮廷貴族による金権支配の象徴として批判された。一方、「有益な奢侈」は経済発展の恩恵が国民の広範な層に行き渡った状態を意味する。懸賞論文の応募者たちは、伝統的な奢侈批判、1730年代以降の奢侈擁護論への意識的反論、さらには二つの奢侈論に見られる「有害な奢侈」への批判を取り込みながら、作品を書き上げている。この意味でアカデミーの懸賞への応募作品は、18世紀フランスの奢侈論争における多様な論点の浸透とそのアプリプリアシオンの様相を具体的に示すものなのである。